

「あなたの母校はどこですか？」「・・・・・・・・」

川口幸宏

(1)

ぼくはことばが一人歩きするのは好まない。いや、嫌悪感を覚えると言った方がいいだろう。ことばが一人歩きする現象を、ぼくは、コトダマ主義と勝手に命名している。もちろん、一つひとつのことばを操作し、ある体系性を持った構造に組み立て、それによって新しい世界を生み出す文学だとか論理学だとか哲学だとか、そういった類はきわめて尊重されなければならない。現にぼく自身、一つひとつのことばを操作し、組み立て、拙いなりに新しい精神世界を創造することを生業としている。だが、何の検証もなくことばが使用され、それによって自他の共同思考が成り立つものだという手合いには、本当に辟易させられるのだ。昨今の「愛国心」ということばーじつは、教育現場では、とくに、「教えること」を義務づけられているーがその典型で、これこそまったく検証されずに、「議論」の名を借りたコトダマ主義が徹底されている。曰く「自分の国を愛するのは自然感情である」云々。

話をごく日常の問題でこのコトダマ主義を拾ってみる。スポーツの国際大会となると、にわか愛国者が急増する。「やっぱり日本人ですから日本の選手やチームを応援するのは自然の感情じゃないですか？そうでしょ？」などと語りかけられる。残念ながら、ぼくはその期待には応えられない。スポーツを観戦する興味が皆無であることもその理由の一つだが、「日本人だから日本の選手・チームを応援するのは自然の感情」という「論理」、すなわち、「だから」の前後にある「日本」ということばだけで結び合っているこの「論理」に、感情的にも理屈的にも、ぼくは応じられないのだ。そういう対応をしていると、中には、「だったら、あなた、日本人を止めなさいよ！」と脅迫的に迫ってくる者もいる。これこそが「愛国心」コトダマ主義の本音なのだろう。スポーツの出自が共同体と共同体との間の戦闘能力を培うものであったことから考えれば「愛国心」コトダマ主義は深い歴史を背負っていると言える。だが、今日で言うスポーツは「近代スポーツ」であるはずである。全体主義や未熟な社会主義の体制下ならいざ知らず、国家共同体や地域共同体の情念を背負うことからは訣別したのではなかったのか。

この「愛国心」コトダマ主義は地域草の根にまで染みこんでいる。例を挙げれば「高校野球」「高校サッカー」がそれである。もう詳細に綴る必要もないだろう。「愛国心」はちゃんと「郷土愛」や「愛校心」と結びついている。そして、今日もまた、にわか「郷土愛」者や「愛校心」者がジャーナリズムに数多く登場して、にこやかに語っている、「やっぱり、郷土出身の選手・チームが勝ち進んでいくのを見ると、うれしいです。もっと上を目指して頑張ってほしい！」と。

「国や郷土を愛する日本人がいなくなった」と嘆く某々氏たちへ、大丈夫です、ご安心クダサイ、こんなにたくさん「愛国心」を持ち「郷土愛」で涙する国民がいますよ、ただし、コトダマ主義者ですけれどね。

(2)

「私、先生の母校の後輩の〇〇と申します。」

「ぼくには母校などありませんが。」

「つかぬ事を伺いますが、川口幸宏先生でいらっしゃいますよね。」

「名前はそうですが、何か？」

「先生は確か三重県立津高等学校昭和 37 年卒でいらっしゃいます。私は平成 15 年卒の、まことに若輩者でございます。」

「よくもまあお調べになられてご苦労様。気味が悪い。確かに津校を卒業しておりますが、母校ではありませんよ。」

「ご卒業なさっておられるのなら母校なのではないですか？」

「ぼくにとって津校は、卒業後制度社会に入っていくための制度的訓練を受けたという意味でしかなく、人生のただの通過点。敢えて言えば父校ですね。」

やれ先物買いに投資しろだの、ワンルームマンションを買えだのと、うるさく言い寄ってくる輩の、ぼくなり撃退法である。だが、ぼくの本音でもある。ぼくには母校など存在しない。いくら拒否しても送りつけられてくる「同窓会新聞」に「踊る」仰々しい活字を読むたびに虫酸が走る。「ああ、恩師**先生、逝く！」「母校精神、いまだ健在なり！」
etc.

「理工系でなければ人でなし」と教師が率先して言い、能力別にクラスを編成し、毎度毎度の試験で成績上位者を張り出すことで顕彰し点数競争を煽り、服装の乱れは心の乱れと制服導入・頭髪統制を試み、従わぬ者を体罰・脅迫まがいの言動で服従させようとし、生徒自らが「灰スクール」と自嘲する。これは間違いなく「父性」(制度・秩序)がなせるワザ。

もし「母性」があったとしたならば、その「父性」に圧せられ落としこぼされている者には「あなたは本当はいい子なのよ」と声を掛けたり、「三当五落」と大きく書いた紙を学習机の前の壁に貼って睡魔に襲われている者にはそっと毛布を掛けてくれたであろう。残念ながら、学校の制度・秩序がすべて完全善であるとし、競争主義社会の勝ち馬になるために寸時の気のゆるみを許さない「父性」しか、ぼくには存在しなかった。

そもそも「母校」とはどういう意味なのか。「母」は「子どもを産み育てる女性」「物を生み出す根源」「(形容詞)そこで育った」を意味している。これらを集約して考えてみると、「母校」とは、教育によって新たな命を生み出し育てる機能を持つところであり、生徒は学習によってそこで育ったという意識を持つことの出来るところ、ということになるだろう。英語やフランス語・ドイツ語で「母校」に相当することばの源は *alma mater* (アル

マ・マター) というラテン語である。もともとは、ローマ人が二人の神すなわち *Ceres* と *Cybele* とに与えた異称。*Ceres* (ケーレス) はローマ神話に登場する神で、穀物・実りの女神、*Cybele* (キュベレ) は、やはり穀物の実りを表象し、小アジア地方の女神で、神々の母である大神のこと。つまり「食料、実りの母 (=源)」という意味である。現行仏辞典では *mère nourricière* (メール・ヌリシエール 恵みの母: 糧をもたらせてくれる母)、独辞典では *nährende Mutter* (ネールンデ・ムッター 哺乳する母) と字源を説明している。

alma mater は中世期の「大学」の出現と密接に関わって使われた。イタリアのボローニャやフランスのパリなどの都市に、宗教勢力や政治権力とは結びつかない学者たちが、辻や広場に立ち、講義をし議論を交わしていた。それ故、ボローニャやパリなどは学問都市と呼ばれていた。ヨーロッパ中の若者たちがその学問を求めて学問都市に旅をし、学者たちの講義を聞き、議論を交わした。若者たちは、名声のある学者を求めて、放浪の旅をする(これを「遊学」という。「留学」は一つのところでとどまって学問を学ぶこと)。

放浪学生はこのように歌う、「わが心の中には／新しい人間ができたのだ／ああ見よ、わが魂は高まるよ。／赤児のようにわしは新しいミルクを飲む／わが心がもはやあのむなし／作りごとで満たされないために。」(梅根悟訳、Symonds, J. A.: *Wine, Woman and Song*, 1907. より)

新しい魂を生んでくれ、ミルクを与えてくれるところを *alma mater* と呼んだわけである。どこの世界に、赤児に管理や競争や処罰などでミルクを飲ませるところがあるか。どこの世界に、母親が自らの子どもに強制的にミルクを飲ませるところがあるか。赤児は自らの意志でミルクを飲む。飲まされるのではない。ぼくはペスタロッチの『隠者の夕暮』の一節を思い起こす。「羊飼いは彼の羊たちの本性を知り、羊たちの本性に従って、羊を育てるではないか。世の支配者たちよ、教育者たちよ、どうしてあなたたちは羊飼いの如くにならないのか」。

少なくともぼくは、自身の学校史において、放浪学生のような新しい魂の誕生を味わったことはないし、羊飼いのような教育者に出会ったことはない。つねに「制度・秩序」という枠にあてはめて自身を見ることを求められた。そう、学校玄関前に据え置かれたあの大きな鏡に自らを写しだし、「まだまだ制度・秩序的人間としては未熟でしかない、このままでは立身出世街道を走ることが出来ない」と自己脅迫する毎日の生活である。

ぼくには「母校」はない。あるのは自身をみじめに評価する物差し「父校」である。